



横沢 彰

剣持 晶子・絵

三限、英語の授業の途中に、翔太はかばんも持たずに教室にやってきた。制服のズボンのポケットに手突っ込み、はきつぶしたシューズをばたん、ばたんと言をさせて歩き、廊下側の自分の席に座った。先生はちらりと見て苦々しい顔をしたが、無視して授業を続けた。

席に座るなり机に突っ伏して眠り出した翔太の背中を、最後列の席で佳奈は、じっと見つめていた。うずくまるように丸まった背中。(あんな背中じゃなかったのに……) バスケの時に見ていた翔太の背中が、いつもずっと伸びていた。張りのある力強い背中だった。あんな情けない背中じゃ、なかった。

そして、佳奈の視線はふと窓側に移る。窓側の前の席。紀のりひなの背中が見える。紀之のわきから授業のノートの下に隠して開いている何かの問題集が見えた。何かを必死に解いている。塾の宿題かもしれない。何かに追われて焦っているような背中。苦しそうなその背中も、三人で一緒にバスケをしていた頃の紀之の背中ではなかった。

(私の背中は、どうなんだろ……)

ふと、佳奈は思った。一番後ろの席だから、だれからも背中は見られない。自分でも見えない。きつとすっきりくたびれた情けない背中になっているかも。小さなため息をつけて、佳奈は黒板の英文をのろのろと写し始めた。